

漫画の中の吃音者たち（二）

以前、「漫画の中の吃音者たち」という文を書き、東京言友会の機関紙に投稿したことがあり、また「全聴連」の機関紙にも転載してもらいました。

これは、そもそもは「全聴連」の機関紙に「漫画の中の聴覚言語障害たち」という連載があり、その連載の中の一回分で、吃音者を主人公にした漫画をいくつもとりあげていたことがあり、その筆者に問い合わせ、コピーを送ってもらったことから始まったことです。その後も何回にも分けて、情報を送ってもらい、またコピーも送ってもらっています。これから、前の文を（一）として、それに続けて、感想をひとつひとつ書いていこうと思っています。文化を語れないと批判されて来た私で、自ら心もとなさを感じつつ、また文化といことを語っていくゆとりを持ち得ていません。この「ゆとり」ということが運動的にも必要であるのではと最近とらえ返しつつ、吃音者の中から文化論に強いひとが引き継いでくれたらという思いで、吃音者もこれから文化ということを問題にしていかななくてはと想いつつの「批評」です。

まだ手元にある分は少ないのですが、一回でひとつの紹介をしてくと、既に紹介してもらっている分でもかなりの連載になります。手に入っていない分も集めつつ、また吃音者や先程の紹介者や色んなひとたちと対話しつつ、面白いシリーズになるのではと密かな期待を抱いています。心もとなさと同居しつつですが・・・。

太田美智雄「どもり若衆」（若木書房）1955 年

ストーリーとしては、父親を殺された少年剣士が復讐しつつ勧善懲悪を果たして行く時代劇です。

この漫画を読んでいて、思い起こしたのは、おそらく、この漫画と同時期の漫画で、ラジオでも放送されていた「赤胴鈴之助」です。戦後の漫画ブームを作った作品で、千葉道場に通う「美少年」の剣士が、勧善懲悪で悪人どもをバツバツとなぎ倒すという筋書きで、「真空稲妻切り」などという「秘剣」を、記憶を苦手にする私が覚えている位で、この漫画が当時の子どもたちに与えたインパクトをとらえてもらえるのでしょうか？ この「秘剣」と人気ぶりは、「巨人の星」の星飛馬と「消える魔球」と言えば連想してもらえるのでしょうか？（これも既に古いでしょうか?!）「赤胴鈴之助」とこの漫画の主人公の「足羽七之助」のキャラクターの共通性は、一見かよわそうで、かわいいという感じがしつつ、実は強い武者ということで通じています。これは、ずっとさかのぼると「牛若丸」にも通じていて、日本のひとつの英雄像の流れを作っています。きっと心理学的な「教養」のあるひとは、セクシュアリティというようなところから、一文を起こすのかも知れません。私の最も不得手とするジャンルなので、このことはさておきます。

この主人公の「足羽七之助」が吃音者です。不思議なのは、この戦後まだ浅い時期に、当時の漫画のキャラクターは、単純に強さが求められるような感じがするのですが、その時代に吃音者が主人公として現れているということです。おそらく、「かわいい」というキ

キャラクターで、「吃音」で「かわいい」←「かわいそう」というところからつなげた、もっと悪い言葉を使えば、「吃音」ということを利用して、「かわいい」というキャラクター作りをしたのだとも言えます。「かわいい」という概念のもつ差別性を指摘するひとがいます。「かわいい」とは「まもってあげたい」という心情で、差別的な心性だと。尤も、それ以前に「かわいそう」という、今からとらえると差別的な心情がはっきりと示されています。それも主人公の思いを寄せる(?)ヒロインの「かわいそうよ でもしかたないワ」という発言に端的に現れています。当時は、「かわいそう」という言葉の差別性の自覚などほとんどなかったし、障害者の反差別の運動なども皆無にひとしい中で、「かわいそう」という発言するひとが、心優しきひとと正的にとらえられていたのでしょうか!? それにしても、なぜ筆者が吃音者を主人公にしたのでしょうか?! 50年に吃音者の修行僧の金閣寺放火事件がおきていますから、そのことのインパクトも考えていたのですが、主人公の描き方からして、つながるとも思えません。周りに吃音者がいて、そのひとへの共鳴を考えてみたのですが、「吃音」それ自体は負性として扱われていますし、「吃音」の表記もデタラメです。この漫画の位置は、もっとその時代の文学とか他の漫画を総体的にあたってみないととらえられないのかも知れません。

ですが、特異性の強調ばかりしているのですが、そもそも「吃音に負けないで頑張る吃音者」という描き方、実はこれは全言連（吃音者の全国団体）が76年に出した「吃音者宣言」的な生き方で（実は、これは吃音者への抑圧、別な形をもってする差別とそれへの迎合ではないかと私は批判しています）、その後の他の漫画にも、自分の得意なことを活かして頑張る吃音者として、ずっと登場してくるのです。ただ、その後の漫画には、ピエロ的な要素が出てくるのに（ピエロはヒーローの形を変えた登場だとか、裏返しだとかいう言い方がありますが、なぜ直接的にヒーローという形で描かれずピエロ的に描かれるのかというと、そこに非対称性＝差別の問題が浮き上がってきます）、ここではそのようなニュアンスが全くありません。

どちらにしても、障害者が描かれている（しかも主人公として）ことと、その時代の差別的障害者観が「差別的!」とまったく認識されないままにあらわれていることとして、押さえておきます。読んでいるとまだ続刊しているようなので、機会があれば続きを読んでまたコメントしてみます。

とり敢えず、次の漫画に移ります。今回は、牧 美也子「シリーズ坂VOL. 2 夏・・・七年目」です。

牧 美也子「シリーズ 坂 VOL.2 夏・・・七年目 」

「まくり屋 第5話」

「カツ丼」

「鯨（シャチ）」

「偽王」

「ハード&ルーズ」

「ギャラリーフェイク」

「柔侠伝」

「名門！多古西応援団」

「口紅コンバット」

「あほんだら」

「桜の君一極道の乙女たちー」

「ハイエナ」